



なかむら・いちや 京都大学経済学部卒。1984年郵政省入省。通信・放送融合政策、インターネット政策を政府で最初に担当。退官後渡米し、98年MITメディアラボ客員教授。2002年スタンフォード日本センター研究所長を経て、06年から慶應義塾大学メディアデザイン研究科教授。政府の知的財産戦略本部などで委員を務めるほか、融合研究所代表理事、デジタルサイネージコンソーシアム理事長なども兼務。

# ITの重要性を再認識 前向きな空気こそ必要

慶應義塾大学大学院教授 中村伊知哉

2011年、デジタル えたのだ。  
分野は15年に一度の大波 スマートフォン、タッグが  
に洗われた。機器、ネット パネルPC、電子書籍 スクリーン環境が登壇。  
トワーク、サービスの3 リーターといった、テレ 地デジも整備され、通信  
点が一斉に変革の期を迎 ビ、パソコン、ケータイ・放送融合ネットワーク

に次ぐ「第4のメディア」

列島が完成した。そしてソーシャルサービスが定着し、コンテンツからコミュニティションへとITサービスが重心を移した。  
パソコン・ケータイ、地デジ、コンテンツが本格化したのは、阪神・淡路大震災の1995年ごろのことだ。3・11の震災の年に、その次のステップが現れたのは、必然なかもしれない。2012年は、その新環境で次なるビジネスが開発されていく。

今回の震災では、あらためてITの重要性が認識された。防波堤をいくらか高くしても安全は確保されない。だが、「逃げろ！」という情報がみんなにしっかり届けば、津波の被害は防げる。情報をどう共有するのか。復興の過程で、まちづくりでデジタルをどう組み込んでいくのか。重要な課題だ。

大敵は自粛ムードだ。不必要に身を縮めると新しい社会は建設できない。日本はこの15年ほど、まずいことがあると「やめておこう」という空気が漂っていた。ケータイを青少年に持たせるな。ユッケを禁止しろ。被災地の薪を大文字で焼くな。それでは元気が出ない。ミゲル少年が消臭力で高らかに歌った勢いで、空気を変えたい。

「アハバタイムズ」 2012年1月1日号 2画